

逝去された名誉会員への追悼文

鴛淵 茂先生を偲んで



大正11年12月15日生
 昭和24年 九州大学医学部卒業
 昭和25年 福岡県技術吏員
 昭和33年 厚生省公衆衛生局防疫課
 昭和37年 同医務局指導課
 昭和39年 大阪府衛生部環境衛生課長

昭和42年 厚生省公衆衛生局栄養課長、結核予防課長
 昭和44年 同環境衛生局食品衛生課長
 昭和47年 長崎県保健部長
 昭和49年 福岡県衛生部長
 昭和51年 大阪府衛生部長
 昭和54年 財団法人食品薬品安全センター常務理事
 平成2年 同理事長
 平成7年 同顧問
 平成18年7月19日 逝去（享年83歳）

鴛淵茂氏は平成18年7月19日、17年程前に手術を受け、完治同然と思われた肺がんの転移・再発により1ヵ月前から入院中の国立病院機構横浜医療センターで、奥様をはじめご家族に見守られながら静かに逝かれた。83歳のご生涯であった。

豊田稜著『蒼空の器』（紫電改で米軍機と交戦中、昭和20年7月松山沖で、弱冠26歳の生涯を遂げた撃墜王・次兄孝氏についてのノンフィクション、昭和53年刊）によれば、鴛淵家は旧平戸藩士の流れをくむ。茂氏は軍医・長崎県衛生課長等を歴任された父君から六人兄弟の四男として生まれたとのことである。

満州医科大学在学半ばで終戦を迎えた後、昭和24年九州大学医学部を卒業された。翌年福岡県庁へ、その後昭和33年からは厚生省へと一貫して衛生行政官の道を歩まれた。

福岡から上京された当時は、未だ住宅事情悪く、千葉県の京成八千代台駅から更に入ったところにある借家から、毎朝満員電車で通勤し、中央官庁のならいで年中夜遅くまで防疫課、食品衛生課等の業務にあたった。

昭和39年、大阪府環境衛生課長に赴任され大阪

との縁ができた。

その後昭和42年に公衆衛生局栄養課長として厚生省に戻られて、結核予防課長、食品衛生課長を歴任された。

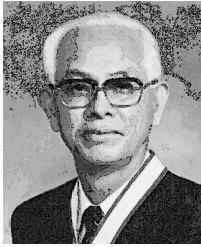
昭和47年からは出身地長崎県庁の保健部長、さらに福岡県衛生部長を経て、昭和51年から再び大阪府に、今度は衛生部長として勤務された。当時、私も1年半に亘ってご指導いただいたが仕事の面では、一挙手一投足をも疎かにしない厳しい上司であった。関西、なかんずく大阪といえば何しろ喧し屋が多く、何かとややこしい問題の多い土地柄であるが、関西人の気質をよく理解され、込み入った事も円滑に進めておられた。特に当時の大阪府議会は少数与党（共産党）の黒田府政であったから、多数党である野党会派との調整をはじめ衛生部長としてのご苦労は大変なものであった。

大阪府衛生部長を最後に昭和54年退官され、横浜市に居を構え、日本自転車振興会からの全額補助を受けて開設された、神奈川県秦野市にラボラトリーを持つ、財団法人食品薬品安全センターの常務理事に就任された。さらに橋本虎六理事長（橋本龍太郎氏の叔父）逝去後は後任理事長として平成2年まで、その後は同センター顧問としてトータル四半世紀にわたり、基礎作りから近年に至るまで、同センターに献身された。食薬センターにとっては無くてはならなかった人であり、氏をおかずしてセンターは継続し得なかったといえる。

鴛淵氏は昔から長身で、姿勢良く、スマートな体型で、80歳を過ぎてもおお豊饒としておられ、とてもお年には見えなかった。そういえば大阪時代の昼食は牛乳一杯のみ、と節食されておられた。本年入院される直前まで、毎週『日本医事新報』から最新の知識を吸収され、厚生省OBたちとマージャンを楽しみ、その腕前は素人離れの書道に精進されておられた。もっと早くに掛け軸用の書の揮毫をお願いすればよかったと今にして思うが最早かなわない。焚香合掌して鴛淵茂先生を追憶するものである。

（元大阪府衛生部医療対策課長、
 元財団法人食品薬品安全センター理事長 柳澤健一郎）

金光克己先生を偲んで



大正3年3月24日生
 昭和14年 岡山医科大学卒業
 昭和14年 岡山医科大学細菌学
 教室助手
 昭和21年 岡山保健所勤務
 昭和25年 厚生省公衆衛生局防
 疫課
 昭和31年 岐阜県衛生部長

昭和35年 厚生省公衆衛生局環境衛生部環境整備課長
 昭和37年 厚生省公衆衛生局保健所課長
 昭和40年 愛知県衛生部長
 昭和43年 厚生省環境衛生局長
 昭和45年 財ビル管理教育センター理事長
 昭和50年 環境衛生金融公庫理事
 昭和54年 財日本公衆衛協合理事長
 昭和55年 財日本環境整備教育センター理事長
 平成元年 財日本産業廃棄物処理振興センター理事長
 平成3年 財日本公衆衛協会展長
 平成11年 財全日本墓園協会展長
 平成18年6月12日 逝去(享年92歳)

金光克己先生は、大正3年3月24日岡山県赤磐郡瀬戸町でお生まれになり、昭和14年岡山医科大学卒業後軍医として海外でご活躍され、昭和21年復員後岡山県岡山保健所勤務を経て、昭和25年厚生省公衆衛生局防疫課勤務となり、その後、岐阜県衛生部長、厚生省環境整備課長、保健所課長、愛知県衛生部長、厚生省環境衛生局長を歴任され、公衆衛生・環境衛生行政に尽力されました。

ご退官後は、多くの団体において要職を歴任され、環境衛生事業の先駆者として長年にわたり多大の貢献をされました。温厚なお人柄と優れた識見によりわれわれ後輩を温かく指導していただきました。

先生のご功績は広い分野にわたりますが、2~3述べますと以下のとおりです。

○ 昭和37年から2年9か月、公衆衛生局保健所課長として、全国の保健所の整備及び業務の改善、地域保健の推進、保健所医師充足対策の強化等に大きく貢献されました。先生は特に地域住民の健康を守る上で、衛生教育の実践の重要性を主張されてこられました。昭和54年7月から財団法人日本公衆衛生協会の理事長に就任され今日まで衛生教育事業の普及啓発、衛生教育担当者の研修等全国の保健衛生活動の推進に大いに貢献されました。

○ 日本公衆衛生学会とのかかわりで、金光先生が尽力されたことが一つあります。当時は、学会の運営、特に財政面では厳しい現状にありました。

一方、学会のあり方に関して、大学関係中心ではなく、現場の保健事業の発展と、保健所の医師や保健婦などの学会への参加を促進されたことで、これに関連して、各都道府県からの学会財政へのサポートを実現されたことで、これは当時の若松公衆衛生局長の学会への大きな期待を具現化された功績として、学会運営関係者の中で語り伝えられているとのことでした。

○ 先生は、環境整備課の初代課長として、施設設備の予算の確保、処理技術水準の向上及び市町村における諸事業の指導など、創始期の困難な仕事に積極的に取り組まれました。その業務内容は、清掃法に基づくし尿処理・ごみ処理整備事業、下水道法に基づく下水道処理場の整備事業、ねずみ・昆虫駆除事業及び墓地埋葬法に関する事務等広範なものでありました。当時は戦後の肥料の普及で、し尿の肥料としての利用が年々減少し、不法投棄が相次ぎ、社会的・行政的に混乱の時代であったのです。

その後、昭和43年に環境衛生局長に就任されたのですが、在任中は、食品衛生、環境衛生及び公害に関する多くの重要問題が相次いで発生し、環境衛生行政における、戦後最大の受難期ともいえる時代でした。

ご退官後は環境衛生事業の先駆者として、昭和45年初代のビル管理センター理事長、昭和52年に全日本墓園協合理事長、昭和55年には初代の環境整備教育センターの理事長に就任され、平成元年日本産業廃棄物処理振興センターの理事長に就任され、多くの業績を残されました。

私は、大学を卒業して保健所の仕事に強い関心を持ち、厚生省のお世話で岐阜県に赴任しました。そのときの衛生部長が金光先生で、そのとき以来様々な局面で先生のご指導・ご助言をいただき、岐阜大学医学部の館正知教授に師事するなど、岐阜県を出発点として公衆衛生の仕事に埋没することになったことを、いまさらの事として思い出しているところです。

金光克己先生の公衆衛生分野における多様なご業績を振り返り、あらためて先生のご冥福をお祈りいたします。

(財団法人日本公衆衛生協合理事長 北川定謙)

福富和夫先生を偲んで



昭和4年11月28日生
 昭和25年 東京農林専門学校獣
 医畜産科卒業
 昭和27年 明星学苑高等学校教
 諭
 昭和33年 東京都中野区立中学
 校教諭

昭和41年 芝浦工業大学数学教室勤務
 昭和49年 理学博士（東京理科大学）
 昭和46年 国立公衆衛生院衛生統計学部勤務
 昭和61年 国立公衆衛生院衛生統計学部長
 平成2年 定年退職
 平成18年6月26日 逝去（享年76歳）

私が福富先生に初めてお目にかかったのは、昭和54年国立公衆衛生院専攻課程での研修で、その時先生は看護コースの研修生から大変人気のある教官でした。岡山県から出向していた保健師の小川咲子（現松田）さんから「トミー」という愛称で呼ばれ、この名前が何年も国立公衆衛生院で流行りました。当時、全国の都道府県から保健師さんが出向していて、たくさんの方から先生はとて愛されました。彼女たちに先生の魅力は何かと聞き私なりに分析しましたが、飾らない「自然体」が彼女たちの心を捉えたようです。事実、先生は人生も生活感も実に清楚な方で、今では当たり前になっている地球環境を考えて余計なエネルギーは使わない、つまらない贅沢はしないということを30年以上前から実践されておりました。今では多くの人がエネルギー問題をマスコミなどで論調しておりますが、この問題を熱っぽく語った方は私の周りでは先生が初めてでした。その時の「地球環境のために余分なお金は使わない。お金を使うことはエネルギーを使うことだから」という言葉に大変新鮮な思いをしました。

私が先生から本格的に指導を受けましたのは、国立公衆衛生院が昭和55年に始めた大学院コースである2年間の専門課程に、私が最初の学生として入学した時からでした。先生の指導方法は何ページを書き直すようにと言うだけでどこをどう直すかはあまり指摘されませんでした。公務員としてそれなりに忙しかったので赤ペンで直してくれればいいのと思ったものです。しかし、私なりに大変でしたその苦勞が人を教える立場にな

ってどんなに役に立つかは今になって初めて分かりました。本当に感謝申し上げます。また、データを分析するあたり統計学的にどのような方法を用いるかを相談に行きましたところ、「5万人対象の調査だからグラフを見れば解るではないか、統計的な処理をする必要はない」と言われた時は目から鱗が落ちるとはこのことかと思いました。統計学の先生ですから難しい処理方法でも教えてくれるかと考えていましたが、先生の教育者としてのモットーは誰にでも解る統計学でしたからその言葉は当然であり、その指導には頭が下がるばかりです。不肖な弟子でしたが、いつまでも温かく指導して頂きましたことを感謝し筆を置きます。（日本大学医学部公衆衛生学部門 教授 大井田隆）

福富和夫先生との接点というのは、私が、昭和52年に国立公衆衛生院疫学部に来てからのことでした。その頃、私は部長の重松逸造先生からカドミウムに関する調査のデータを与えられ、解析を命ぜられていました。その解析に関しては福富先生の指導を受けていたのですが、時々先生は「統計のことばかり考えずに、カドミウムの医学のことも勉強しなさいよ」とおっしゃいました。要するに医学の勉強、カドミウムに関する勉強を怠って、統計の勉強をしても始まらないということでしょう。

国立公衆衛生院疫学部との共同研究も多く、重松逸造先生や柳川洋先生達とのスモンの原因究明や、疾病地図作成の研究グループにも参加していただきました。また、昭和60年頃にみられた自殺死亡率の上昇に着目し、大手銀行がサラ金業界に多額の融資をした結果であるとの主張をなさいました。

福富先生との交際は統計という気詰まりな学問よりも、鳥という共通の趣味の方が本当は楽しかったのです。私は、（鳥類などを）正しく分類するという事は統計の基本でもあるのだと勝手な理屈をつけていました。また、星融先生（関保健所、当時）、清水弘之先生や高塚直能先生（岐阜大学医学部、当時）、三徳和子さん（保健婦、当時）といった岐阜県の人たちと毎年探鳥会を開いたことも楽しい思い出になっています。

こうして私は勉強の上だけでなく、遊びにおいても福富先生のお世話になりました。福富先生ありがとうございました。心から先生のご冥福をお祈りします。

（聖徳大学人文学部人間栄養学科 教授 簗輪眞澄）

山口健男先生を偲んで



大正7年8月2日生
 昭和16年 東京帝国大学医学部
 卒業
 昭和17年 東京帝国大学医学部
 坂口内科
 昭和21年 群馬県高崎保健所長
 昭和36年 群馬県桐生保健所長

昭和44年 群馬県高崎保健所長

昭和59年 同上退官

昭和59年 群馬女子短期大学教授

平成17年11月29日 逝去(享年87歳)

山口健男先生は、旧制高崎中学校4年修了後静岡高校から東京帝国大学医学部を昭和16年に卒業された稀代の秀才で、昭和21年6月高崎保健所長に就任され、36年8月桐生保健所長、44年8月から59年3月迄再び高崎保健所長として活躍されました。新生日本の公衆衛生プログラムでは、保健所が各地方における公衆衛生の実施機関と位置づけられ、保健所長が管轄区域における一切の衛生事項を管掌する責任と権限を持つことに、先生は興味を持たれ、臨床とは異なる新しい公衆衛生の考え方に共鳴され、保健所長を天職とし、公衆衛生の王道を自ら切り開かれました。先生は、疫学や公衆衛生学をはじめ、数理統計学へのご造詣も深く、大学や研究機関からの招聘、本庁の課長職や衛生部長への昇進話も少なくなかったと思われませんが、それらを全て断り、38年余の県庁勤務を終始一貫、第一線の保健所長として貫かれましたことは、今でも信じがたい事ですが、本当に有難いことでした。

私が山口先生に初めてお会いしたのは、昭和41年4月、桐生保健所の所長室に新採のご挨拶に伺った時でした。予防医学と臨床の中間の道を歩みたいと嘯く若造に対し、所長歴20年の先生は、旧知の仲間の如く温かくお迎えいただき、公衆衛生の魅力の一端をわかりやすく論じて下さいました。早速、桐生市に多発していた猩紅熱の疫学調査を始めましたが、疫学については全くの無知のため、その地域の変動については、先生自ら分布図を作られ、循環変動の統計学的検定までしていただきました。保健所の予防課業務研究会では「与えられた仕事をただ機械的に行うのではなく、事業毎にその必要性やねらいというものを我

々の頭で考え、計画をねり、実施し、その結果をみんなで検討し合う態度で実施していくことが、仕事に対する意欲を高め、生き甲斐を感じさせることにつながると思う」と保健活動の基本について話しておられます。後年「ここの所長は保健所勤務にあたり、公衆衛生院の研修を断り、大学の内科に席を置き循環器の臨床を勉強しているという経歴の持ち主であるが…」と紹介されましたが(公衆衛生 40: 390, 1976)、その心は、公衆衛生の師は山口先生おひとりりで十分と確信していたためでした。その後、公衆衛生から逃げ出すことなく、何とか同じ道を歩んでこられたのも、先生の慈愛に満ちたご教導、ご支援の賜物であると深く感謝しております。

昭和40年以降は、県の保健所長会長及び全国保健所長会理事などの要職を歴任され、保健所の機能強化や活性化に獅子奮迅の活躍をされました。「飢えた人を前に食物の議論をいくら並べても解決しない。唯ひとつ、現在ある保健所を強化しさえすれば足りる」「保健所長は聴診器を持つべし」「保健所長は公衆衛生の専門家として強いリーダーシップを発揮すべし」とは、当時の保健所論議に一石を投じた極めて重い提言であったと思われます。

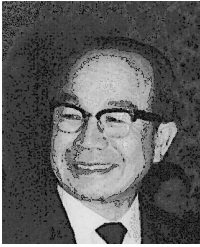
昭和58年、老人保健法が成立し、保健所のあり方が問われた時には「保健所の対人保健活動に対する解決の道は、全ての保健所に固有の対人保健業務を確立することである。かって結核検診は保健所固有の業務であり、たとえ隣に結核療養所が建ってもその責任を放棄することがなかったではないか」「老人保健に関する保健所固有の業務としては、機能訓練と痴呆性老人対策を挙げ、保健と福祉の一体的活動を行うべき」などの具体的、積極的な提言は、先生が生涯を通じてとり組んだ公衆衛生に関する先生の卓越した考え方とその実践活動がそのまま具現化したものであり、全国的にも多くの共感を得て、保健活動の展開の原動力になってきたものと思います。

その後、「介護」全盛時代に入り、先生が生涯をかけて築いてこられた保健所の実像とかけ離れた方向に行こうとしていることは、誠に無念！と言わざるを得ません。

ここに、ご薫陶を受けた多くの仲間達とともに、先生のご遺徳を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

(元群馬県衛生環境部長 大月邦夫)

山下 章先生を偲んで



大正2年10月20日生
 昭和11年 東京医学専門学校卒業
 昭和15年 国立公衆衛生院医学
 科卒業
 昭和26年 東京都衛生局防疫課長
 昭和30年 東京都四谷保健所長
 昭和32年 東京都渋谷保健所長

昭和38年 東京都麹町保健所長
 昭和44年 東京都日本橋保健所長
 昭和49年 東京医科大学衛生学公衆衛生学講師
 昭和50年 保健文化賞受賞
 昭和53年 社会福祉法人武蔵野療園常務理事
 昭和55年 財団法人母子衛生研究会理事
 昭和61年 日本公衆衛生学会名誉会員
 勲四等瑞宝章叙勲
 平成10年 社会福祉法人武蔵野療園理事長
 平成18年2月13日 逝去（享年92歳）

平成18（2006）年2月13日に、山下 章先生が亡くなりました。92歳の長寿でした。

山下先生の御名前を聞いて、「ああ、あの有名な先生!!」とすぐには判らない方々も多くなってきているのではないかと思います。先生は我が国の公衆衛生のパイオニアの一人として東京市・東京都の衛生行政、母校での医師養成教育、地域での母子保健活動や高齢者医療の実践など多方面でご活躍され、数多くの業績を上げてこられました。

山下先生は、昭和11（1936）年に東京医学専門学校（東京医科大学の前身）を卒業後、直ちに当時の東京市保健局防疫課に勤務されましたが、その当時の東京の保健衛生業務は警視庁、東京府、東京市の三者が分担し、東京市の業務は山下先生をはじめ20数名の医師が行っていた種痘とジフテリアの予防接種が中心であったそうです。

昭和14（1939）年からは、国立公衆衛生院の第一期生として1年間学ばれ、戦後には東京都衛生局防疫課長や都内4ヶ所の保健所長として疫学を基礎とした防疫活動や結核対策を、或いは家族計画指導を中心とした母子保健活動などを実践され、昭和50（1975）年には「保健文化賞」を受賞

されるという輝かしいご経歴を持たれています。

筆者が山下先生に初めてお会いしたのは4年生の公衆衛生学の講義の時でしたが、正直なところ、当時の印象はほとんど残っておりません。しかし、昭和46（1971）年から講義の総まとめとして先生が始められていた1週間の保健所実習に参加した時の記憶は今でも強く残っており、また山下先生の印象としても残っていたことが、20数年後に判明しました。

当時、山下先生は日本橋保健所長をされておられ、筆者は地域の救急医療の現状を知る上で是非とも救急車への同乗を体験したいとお願いしたところ、東京消防庁に掛け合っただき実現することができました。医学生が同乗するという前例はなく、その時にはとても大変なことが実習できたとは思っていなかったのですが、後年、筆者も非常勤講師として母校での保健所実習報告会に参加していたある時、山下先生が大勢の医学生に保健所実習を開始された当時のことを説明される中で、「昔、救急車に同乗しての実習を希望した熱心な医学生がいたが・・・」と話されました。その時、空かさず「先生、それは私です。」と言ったところ、山下先生は「何だ、梶山君だったのか。やはり公衆衛生の仕事に携わっているとは、うれしい限りだ。」とおっしゃられたのが、今でも強く印象に残っています。

山下先生は、地域の住民全体が健康な生活を送れるようなリーダーシップが取れる医師の養成を目的としてこの保健所実習には特に力を入れて取り組まれており、実習報告会では一人ひとりの学生から感想を聞くのをとても楽しみにしておられました。

筆者は医学生であった当時から、そしてその後の都立病院での勤務医時代にも長野県下伊那郡での無医村活動に係わり続けてきましたが、その後の筆者の公衆衛生医師としての進路は、山下先生が常々唱えられていた「公衆衛生を深く理解した、住民とともにある医師」像から大きな影響を受けたものと考えています。

山下先生と出会えた幸せに感謝し、衷心より、山下 章先生のご冥福をお祈りいたします。

（東京都福祉保健局技監 梶山純一）